

----- (前回からの続き) -----

タイチ「スケジュールはスケジュールだって！」

アキコ「でも、今の状況を掴むのが先決でしょ！」

珍しくフロアにタイチの声が響いた。続くアキコの声もそれに負けてはいない。みんなどうしたんだという感じでいっせいに振り返っている。チアキ達もその中にいた。

タイチ「だから、規模によって管理方法は違っていいんだよ。うちの場合は人数だって少数精鋭だし、連絡もうまくいっている」

アキコ「スケジュール遅延が常習化してるけどね」

タイチ「俺がタッチする前からみれば減ってる…」

アキコがドアを閉めたので、その後の会話は聞こえなくなったが、なにやら言い争っている雰囲気。これ以上は平行線だといいいながら、突然タイチが出てきて、そのまま開発部に戻って行ってしまった。ドアまで後を追ってきたアキコはしょうがないという感じでパタンとドアを閉めた。

モトコ「久しぶりだよなー。ああいうの。最近はみんな大人だもんねー」

モトコがチアキに話しかけてきた。いつも、モトコはこういう情報には長けている。モトコによると、この会社も昔はよく怒鳴り合いがあったらしい。もっとも、現在の比較的きれいで大きなビルじゃなくって、小さい雑居ビルだったらしいけど。でも、あの冷静なタイチ先輩があんなに声を荒げるのを初めて聞いた。ちょっとショックなチアキだった。

モトコ「向うの会社じゃ、こういうのよくあったらしいよ。あの二人」

チアキ「えっ！同じ会社だったの？」

モトコ「あれ、知らなかった？」

えっ！どういうことよ？それって…。チアキが詳しく聞こうとしたとき、ちょうどモトコに電話が入った。あのモトコも最近は定時ギリギリまでみっちり仕事らしい。アキコさんがやってきて、ウェブデザイン部もちょっと雰囲気が変わってるし。でも、タイチ先輩もアキコさんも何をあんなにやりあってたんだろう、スケジュールは遅れていることは確かだけど…。

*

タイチ「調子はどう？」

気分転換のために休憩室で、ウェブサイトの画面ショットを眺めていたチア

キはハッと目線を上げた。さっき、アキコさんとやり合っていたタイチ先輩だ。チアキはちょっと気まずさを感じたが気を取り直して答えた。

チアキ「ウェブデザインの方はスケジュールに追いつきます！」

タイチ「誰もスケジュールのことは聞いてないって。さっきのはよくあることだよ。何でも管理したがる人なんだって、水口さんは」

アキコさんとは...って、...今は聞くのやめよう。

チアキ「...大丈夫なんですか。スケジュール」

タイチ「全然、大丈夫。みんな気にし過ぎ。それに頑張ってるじゃない。成果もちゃんと出してるしさ。それより気になってるんだよね…」

タイチが指差した先にはパソコンがあって、その画面は昨日、チアキが教えてもらっていたDOSの画面がそのままになっていた。

タイチ「スリープが効いたからなんだろうけど、誰も使ってないのかな、こいつら。もうすぐ退社の時間だけど昨日の続きやってしまう？ 中途半端になってるし。何だかんだで明日から忙しくなるから、しばらくDOSの説明をしてあげられそうもないしね」

チアキ「そうですか...じゃあ、すみませんけど...えっと、準備します」

いつも持ち歩いているのか、バッグの中から例のノートを取り出してスタンバイしているチアキを見て、やる気はホンモノなのかもしれないとタイチは思い始めていた。

タイチ「じゃあ、ファイルの中身を見ることから始めようか。test.txtってファイルはdirで確認できるよね」

チアキ「ええっと、大丈夫です」

チアキはテキパキとDOSのコマンドを打って、test.txtの存在を確かめた。DOSを使う違和感がなくなったのか、もともと速いタイプがかなり上達している。

```
C:\¥foobar>dir
```

ドライブ C: のボリュームラベルは WINDOWS 98

ボリウムシリアル番号は 1471-12D6

ディレクトリは C:\¥foobar

```

.          <DIR>          04-04-05  12:13  .
..         <DIR>          04-04-05  12:13  ..
TEST      TXT            58  04-04-05  12:15  test.txt
          1 個              58 バイトのファイルがあります。

```

2 ディレクトリ 4,587.89 メガバイトの空きがあります.

タイチ「じゃあ、typeコマンドを入力してみようか。どうやって入力するか想像できる？」

チアキ「...。えっと、"type test.txt"ですか？」

いつもイジワルな問いかけをしてくるのよね、タイチ先輩は。いつものやり取りを思い出して、ちょっと気分が晴れたチアキは基本的には間違っていないはずっ！と、半分あてずっぽに答えた。

タイチ「そのとおり。チアキちゃんはいつもカンがいい。じゃ、そのまま打ってみて」

まぐれ当たりだよおと思いながら、初めて打つコマンドだからチアキは慎重に入力して、エンターを最後に打った。DOS画面は次のようになっていた。

```
C:\¥foobar>type test.txt
今年の春は良い天気が続きます。
花見の季節になりました。
```

チアキ「あ、昨日、メモ帳で打った文章だ！でも、コマンドの名前はtypeだけど、タイプしたのって私なんだけど...」

タイチ「え？ああ...なるほどね。チアキちゃん視点だとそうなるね。確かに」

チアキ「でしょ。printとかだったら納得だけど...。あ、そうか！DOSにタイプしろ！って命令してるってことなのかな」

タイチ「まあ、そうだね。あくまで『コマンド(命令)』だからね」

チアキ「ふーん。でも...」

タイチ「な、なに？まだ何か...」

チアキ「凄いですね！本当にファイルってWindowsもDOSも自由に行き来できるんだ！」

じーっと画面を見つめるチアキ。何かと何かを繋げようとしているみたいだ。画面からチアキが目をそらすまでタイチは待ってみた。しばらくして、何かわかったのか、うなづいている。やっぱり、傍目から見るとちょっと変った子だな。タイチは笑いそうになるのを堪えて、次を続けた。

タイチ「じゃあ、もう一度、Windowsのメモ帳でtest.txtを開いて、今度は縦に長い文章を打ってみて。25行以上ね」

チアキ「はい...」

チアキは何か一つ、理解の山を越えたように落ち着いた様子でメモ帳を開いた。その後、"今年の春は良い天気が続きます。花見の季節になりました。"

と入力して、一文字ずつ改行していった。その様子を見ていたタイチはカン
だけじゃなく、応用の効く子なんだと改めて思った。

タイチ「じゃ、準備できたら、同じコマンドを使ってみて」

チアキ「"type test.txt"にエンターっと。...あれ、消えていっちゃった」

タイチ「...」

チアキがどう考えるかタイチは観察するように眺めている。チアキはチアキ
で、そんな雰囲気は露知らずで、過去のDOSコマンドとの対比に頭を巡らし
ていた。

チアキ「そっか、dirの時のようにポーズスイッチを使えばいいんですよね！」

タイチ「残念でした。DOSの世界は複雑だよね。typeコマンドを作った人は
そういうスイッチをつけなかったんだ。それに他のコマンドがある
から必要なかったんだ」

チアキ「その、他のコマンドってのはどんなのですか？」

一生懸命に考えたのに！ちょっと、むっとして問いかけると案の定、タイチ
の答えはチアキが知らないコマンドだった。

タイチ「moreコマンドっていうもので、typeコマンドと同じように打てばい
いんだ」

何がmoreよ。そのままの名前じゃない！チアキはバチバチとキーを叩いて、
そのコマンドを試してみた。

```
C:\foobar>more test.txt
```

```
...(略)...
```

```
花
```

```
見
```

```
の
```

```
季
```

```
節
```

```
に
```

```
-- 続く --
```

チアキ「あ、続くって出てますけど...」

タイチ「一画面に入りきらないときは、この表示で一旦停止するんだ。ま、
これもバージョンによって微妙に表示が異なるけどね。そのまま、
スペースを打ってごらん」

チアキがスペースを打つとdirコマンドと同じように、一ページずつスクロー

ルしていく。でも、なんで、"type /p test.txt"とかじゃないのよ。どうもDOSコマンドの気まぐれ的な感じには馴染めないなとチアキは思った。

タイチ「そういうわけで、ファイルの内容が多いときはmoreコマンドを使うんだよね」

チアキ「内容が多いか少ないか知るのが面倒だから、moreばかり使いそうだけど…。あ！じゃあ、ワードのファイルとかExcelのファイルと違って、typeとかmoreで表示できるんですか！？」

この純粋な発想が面白いなとタイチは思った。typeになぜポーズスイッチがないのかとか、typeでなぜワードが表示できないのかとか。そんなの当たり前じゃないかと知識優先のエンジニアはすぐに言うけど、本当にそうかと考えることが大切なんだ。…と常に思っているタイチはチアキの発想に妙な親近感を覚えたのだった。

タイチ「できるといいね。でも出来ないんだ。typeやmoreが出来るのはテキストファイルの表示だけなんだ」

チアキ「じゃあ、ワードやエクセルのファイルをDOSで見ることは出来な…。そっか。DOSではもともと動かさないですよ。ワードと違って」

タイチ「一応はそういうことだね。じゃあ、test.txtの内容を元に戻しておいてくれるかな。今年の春は良い天気と桜が満開ってやつね」

チアキ「Windowsのメモ帳で直して、元の二行に戻せばいいんですね」

マウスとDELキーを使いながら、クリックとキーインを凄まじい勢いで繰り返したチアキは、あっという間に縦にした文章を横に繋げ直して二行の文章にしてしまった。

マウス使用が前提のWindowsは、事務でバリバリと仕事をこなす女性にはウケが悪い。よく事務で電卓を恐ろしいスピードで叩く人がいるが、そういう人はパソコンのテンキーを電卓代わりにして、やはり凄いスピードで入力するものだ。チアキのマウスとキー捌きは、まさに事務員のそれに近かった。

タイチ「よし。ここまでで、とりあえず一時中断だ。明日からはちょっと忙しくなるけど、来週には時間が取れるようにするよ。都合が付いたらメールしておくね」

チアキ「はい！楽しみに待ってます！」

*

チアキのそのときの気分は、まさにその言葉どおりだった。駅前でモトコと一緒にいるまでは。モトコは今から合コンだそうで、今度は期待できるだの何だのとウキウキだったけど、急に真面目に話を振ってきた。

モトコ「チアキ、厳しい人が上司になっちゃったね」

チアキ「第一印象はね」

モトコ「第二印象も第三印象も同じだって。きびちーよ、アキコ先輩」

モトコは昔、一緒に仕事をしていたよしみからか、役職的には上のアキコさんを先輩呼びしていた。アキコさんも容認しているようだし。"そんなことより、ここで聞くのよ、チアキっ"とチアキは勇気を振り絞って聞いてみた。

チアキ「ところで、タイチ先輩とアキコさんて、知り合い？」

モトコ「...うん。タイチさんはアキコ先輩の出向先のTrueBios社から引き抜かれたエンジニアなんだよ。ちょうど、チアキとすれ違いみたいにアキコ先輩が出向したグループ会社に行って、一年間は同じプロジェクトで仕事してたはずだよ。その当時は会社間には資本関係がなくて、協力会社って感じだったんだけど、その前からも仕事では結構やり合っていたみたい。私が入社した時にはもう仕事関係があったはずだし、その意味じゃ長いよね、あの二人。意外に気が合ってるんじゃないかって、その当時からウワサになっていたっけ。今回、アキコ先輩が戻ってきて、また...。あっと、話し過ぎだね。あたい、こっちだから」

話を早く切り上げたいかのように歩みを早めて、向うに行ってしまったモトコ。その後ろ姿を見つめながらチアキは改めて思った。タイチ先輩がこっこの会社に来たのが一年とちょっと前。私が入社してから一年目ってことか。せいぜい一年しかタイチ先輩のことを知らないんだ...

----- (つづく) -----